

研究会も12年目を迎えました。名称も「登校拒否研究会」から「不登校問題研究会」に変わり、今年からは、会場も「ニッショウホール」から「オリンピック記念青少年総合センター」に変わりました。12年前、不登校問題は心の問題だからなくなることは難しいけれども、そんなには増えないのでは、と思っていました。しかし、ついに14万人に迫り、子どもの数は減少しているにもかかわらず増え続けています。不登校は本人にとっても、家族にとっても、学校にとってもマイナスなのに何故増え続けるのか。子ども・家族・学校だけでなく、大きな社会病理の一つとして、捉える時期がもう来ているのではないのでしょうか。



平成13年度第11回

教師&専門家のための登校拒否研修会 参加された皆様の声より

昨年のアンケートの中からいくつかのご意見を掲載させていただきました。皆様にご回答いただいたアンケートは各講師の先生方へ複写しお送りさせて頂いております。

『不登校問題等に対する教育行政の取組』

文部科学省初等中等教育局児童生徒課
生徒指導調査官 吉富 芳正

- 施設として様々取り組んでいることは良くわかりました。しかし、東京はともかく、地方においてカウンセラーの先生を得ることは大変難しいのが実状です。スクールカウンセラーを各校に常置するなど、もっと拡大させ、需要の増加と地位の安定を図るほか、スクールカウンセラーの養成にも力を入れて欲しいと、話を聞きながら思いました。(栃木県教員)
- 文科省の方から、現場レベルにも通じる話をお聞きすることができてよかったですと思います。(福岡県教員)
- 行政から見た教育と現場の現状にはまさしく「ギャップ」があると感じました。とても解りやすく要点をおさえたお話だったにもかかわらず、理解しにくかったのは、自分の教育行政に関する知識が足りないためです。文科省の組織も「レインボープラン」などの取り組みも知らず、HPも見ただけで恥づかしい。でも、現場まで、それらが伝わっていないのが現状です。数字ではなかなか伝わりにくい、現場の雰囲気や子どもたちの思いも、行政に伝えるのは難しいですね。(千葉県教員)

『子どもと家庭の諸問題に

対する福祉行政の取組』

厚生労働省雇用均等・児童家庭局
総務課児童福祉専門官 坂本 正子

- 熱意が感じられた。昨年までは施策の紹介に終わっていた気がしたが、ともに取り組んで行きたい気持ちが伝わった。昨年、虐待児を扱ったが、マネジメント機能の大切さ、中心に動く人の大切さがわかった。行政側での無理解、不適切さがはっきりする面が多かった。行政側に教員がもっと入って行って、機能していくシステム作りが欲しい。(山形県教員)
- 児童福祉関係の仕事内容が始めて理解できた。今日的課題の多い分野であり、もう少し実例をもとに深めてもらえればよかった。最後のリーダーシップと担当責任の明確化を話していたが、学校にもあてはまることであり、共感できた。(青森県教員)
- 自分には難しい話でしたが、行政と学校のかかわりが非常に重要なことであるという先生の考えが良くわかりました。法律や行政について、本当にお話についていけるくらいには勉強しなくてはと思いました。(福岡県学生)

シンポジウム『私の不登校体験・親の対応、先生方の指導援助、助かったこと嫌だったこと』

コーディネーター/NHK 週刊子どもニュースキャスター
池上 彰&様々なタイプの不登校経験者3名~4名

- 子どもたちの生の声を聞くことが出来た。苦しいと時期を乗り越えてきた人の言葉には重みを感じます。子どもたちがしっかり受け答

えをしていたのが印象的でした。(神奈川県学生)

- 池上さんの上手な進め方もあり、とても充実したお話が聞けました。アレだけの大人数の前で話したくない自分の過去をあそこまで語ってくれた4人の若者に感謝の気持ちでいっぱいです。言葉をひとつひとつ探しながら、一生懸命話してくれた彼ら、彼女らの姿に涙が出ました。このようなすばらしいシンポジウムを企画してくださったことに、心から感謝します。ありがとうございました。(秋田県教員)
- 自分の体験を話されることは大変勇気のいることです。それは痛みを伴うものだからです。でもよく思い起こされて、冷静に自分のことを話すまで成長されたのだなあと感動しました。
- ひとつひとつの質問に誠実に答えてくださる体験者の方の気持ちがうれしかった。「はじめて学校が楽しいと思った」「友達との…」の言葉がとても重く心にひびきました。日ごろの学校生活の中での児童とのかかわり方が問われていると感じられた。(広島県教員)
- 不登校経験者の話に人生の重みを感じました。自己と対峙し考え続け苦しみを乗り越えた人だからこそ言える言葉を聞きました。また教師の言葉の重さもあらためて感じました。(栃木県教員)

『学級崩壊・授業困難はこうして乗り越える』

国際学院埼玉短期大学教授
附属教育相談研究センター所長 金子 保

- 先生の懇切丁寧な説明は問題をスパッと切って解決に導いてくれそうで、聞いていてスカッとしますし、内容が具体的なので実践に移し易そうです。基本的には子どもたちを見る姿勢というか、いい意味の「ため」のようなものを身につけることが大事だと再認識させてもらいました。(滋賀県教員)
- 幼児教育の大切さを共感しています。自由保育・設定保育をうまくバランスよく取り入れながら、基本的な生活習慣の確立、社会的ルール、マナーを身につけることの大切さを痛感しています。連携訪問などで、保育園、幼稚園に伝えていけたらと思います。(香川県教員)

- だんだん年齢が高くなる教師の考えと子どもたちの考えのずれが崩壊の芽を生むような気がします。アンテナを高くはって子どもたちの意識を少しでも理解していかなくてはと2学期を前に思います。(神奈川県教員)
- 教師の「教える」という資質の向上が大切で圧と感じた。また教師は柔軟な考え方を意識しなくてはならない。(岐阜県教員)
- きめ細かく子どもの心を見取って日々の指導にあたるには、現行の教師の数では難しいと感じた。気になっていても、現実、手のかかる子を何人も抱えると手が回らない。教師の力量ばかりの問題にせず、行政への働きかけが必要だと思う。(新潟県教員)

『教育臨床から教室へ、求められる』

子どもの心を捉える生徒指導』

奈良県教育研究所教育相談係長 池島 徳大

- 実践例から話を進められ、興味深く聞くことができました。転校生への配慮など、日常のささいなこととして処理してきた自分に気づかされました。(千葉県教員)
- 成長エネルギーを抑えている圧力は何なのか、個へのアプローチの仕方の大切さがわかった。(千葉県教員)
- 小学校などでは感情を出す子が多くそのための問題点や理解のしやすさがあると思います。高校では逆に感情を出しにくい生徒が多く教師も無理に表現させないような指導が多くなっている。ロールプレイングの話聞き、思い切って教師が自己表現し、生徒に示すことも大切だと思った。生徒に求めるばかりではいけないと思った。教師の連携が逆に難しいとは思いますが。(新潟県教員)
- 人間は未熟である。間違いをしながら、学び成長していく(児童も担任も)「いじめ」は成長のきっかけである。それを機会にみんなが一歩進めればよい。という言葉が心に残りました。(福島県教員)
- 教育臨床が教育現場で必要になってきている現在、専門的知識を持ち、子どもの心に寄り添って支援できる教師が必要だと考えている。自分自身教育臨床研修をし、現場教育の中で実践し効果のある技法をつかみたい。人はみな能力が違い、良いところがある。いけないところもあると認め合える人間、そして自己決定でき、生きていける子を育てたい。(千葉

県教員)

『社会調査から見たいじめ・不登校現象』

大阪市立大学大学院教授 森田 洋司

- 社会学からの視点が自分には難しかったが、先生のかみくだきつつ面白くお話して下さった内容はとてもよくわかりました。レジュメの後半についてもっと知りたく、時間が無いのが残念でした。コミュニケーション能力、ソーシャルスキルなどについては道徳の序行にもかかわり、ぜひ別の機会に講義をうかがいたいです。(千葉県教員)
- 国際的に見たいじめ、不登校の話から、ミクロになっている子ども達の社会性をどうにか広くしていくよう努力したいと思いました。(長崎県教員)
- 社会的な流れ、政府の姿勢など、観点をはっきりさせて教育現場の状況を捉えている点などで大変参考になった。(富山県教員)
- 市民感覚、共同体の中の自分というアイデンティティというのがとても心にのこりました。周囲の人の目を気にして、変に目立たないようにしているくせに、公共の場では堂々とマナー違反をすると言う一見矛盾した現象を昔レポートでまとめようとして苦労したことがあります。これこそミクロな世界とマクロの世界として考えればわかりやすいと納得できました。世界のいじめの本は以前読みましたが、その調査の規模にはただもうびっくりしてしまいました。(茨城県教員)
- やや難しい言葉もありましたが、多様性の承認の必要性、ソーシャルスキルトレーニング等について自分がもっともっと知らなくてはならない、知っていることで初めて様々な取り組みができるということを痛感しました。もっともっとお話を伺いたいと思った講話でした。(秋田県教員)

『ひきこもり・不登校、肯定的感情を育てる対応』

教育研究所所長・教育コンサルタント
牟田 武生

- 自分が受け持った不登校の子との日々とを重ねながら聞いていました。そのとき、自分がやってきたことは、良かったのかどうかと、一つ一つ確認しながら。(神奈川県教員)
- 不登校の子どもたちがそれぞれの段階でどん

な心理情景なのかを具体的に説明してもらい納得する点や反省する点(こう言ったからまずかったようだ)がはっきりしてよかった。(滋賀県教員)

- 具体的な対応の仕方を示していただき、今後参考にしたいと思います。(香川県教員)
- 不登校のお子さんの持つ多くの考え方を整理して話して下さったのでわかりやすかった。不登校のお子さんも、暴力行動を行うお子さんも、心理的に似ていると言う点にはハッとさせられました。(神奈川県教員)

『不登校・担任はいかに取り組むか』

国立特殊教育総合研究所情緒障害教育研究室長
花輪 敏男

- 不登校児は本来冷静であると言うことが良くわかりました。どうしても慌てる保護者が多く、保護者カウンセリングを試みている反面、進級卒業などという時期が来るとどうしても保護者側から「進路変更」(進学、休学、転校)などの言葉が出る。特に高校であり、田舎の学校のため、世間体を気にすることがあり、この保護者の改革の変化することが難しい。
- 日常的な生活の積み重ねをどう家の人と積み重ねていくか、どうアドバイスしていくかが大切であることを実感した。しかし、現実には、そんなことは家の人がしっかりすれば、家の人が無関心で仕方ないといわれて、なかなか決め細やかなかわりを物理的にとれない。親が生活におわれて、子どもにかまえない例が多い。(山形県教員)
- 本からでは得られないテクニックをたくさん教えていただきました。このような演題ではガイダンス的な後援になりがちですが、実践に基づき豊富な実例でのお話大変よくわかりました。(青森県教員)
- 発想が違うし、教師の欠点をついているので大変よい勉強になった。今、一人一人を大切に教育が訴えられているが、それが本人、家庭に伝わっているのか疑問を感じる。その反対を言っているようで、生徒への共感と勇気を与えるものとする。(福島県相談員)
- 段階を踏んでのアプローチの仕方のお話で、参考になりました。学校の不適応は様々(不登校・非行・また情緒障害など)であるが、どの子にも基本的な姿勢は変わらないと思い

ました。(神奈川県教員)

運営について

- 個別に相談できる時間があるといい
- 参加者名簿は出して欲しい。
- 昼食の時間が短い
- 関西地区でも開催して欲しい
- 懇親会など交流の場が欲しい
- 分科会があるといい
- 質問用紙を使った質問コーナーがあるといい
- 高校での不登校対策に関するテーマが少ない
- 参加費が高い
- 最終日の終了時間は厳守して欲しい
- 受付のチェックがあまり
- 冬休みも研修会を行って欲しい

多くのご意見ありがとうございました。運営面についても改善する余地はまだたくさんあります。今年度より、会場がかわりました。また多くのご不自由をおかけするのではないかと心配もしております。

寄せられたご意見の中では参加者名簿については検討していきたいと思っています。また時間配分についても多くのご意見が寄せられました。休憩時間が短いというご意見が多く、今年度は少しゆとりのスケジュールに設定しています。他にも分科会や質問コーナーの設置など、より具体的なものを求める声も多く寄せられました。分科会は以前に行ったことがありましたが、会場、スタッフ、ボランティア確保の問題など、事務局の力量の点から現在は行っておりません。今後なんらかの方法で実施できるように検討していきたいと考えています。

また、食事場所の確保に問題があることから、ニッショーホールの方がいいというご意見も多く寄せられていましたが、決算報告から会場費が高すぎるとのご指摘もあり、今年度からニッショーホールから国立オリンピック記念青少年総合センターに移ることになりました。

他にも時間厳守など今年も気をつけなければならない点が多くありました。

今後も事務局へのご意見ご要望がありましたらぜひお寄せ下さい。

まだまだいたらない点が多いと思いますが今後も努力を続けてゆく所存です。今後ともどうぞよろしくお願い致します。(事務局)

不登校・ひきこもり 長期化と増加についての雑感

10年間、家にひきこもり、殆んど外出しない今年20になるA子の家庭訪問が始まって、2ヶ月

が過ぎようとしている。

小学3年生の時、授業中、突然、腹痛に見舞われ、手をあげ、先生に許可をもらうのも恥ずかしく、冷や汗をかきながら我慢するが、無常にも下着を汚してしまう。初めての生理だった。保健室の先生はやさしく慰められるが、担任は母親を呼び出し、「なぜ、事前に準備しなかったのか？」と、注意。母は、「A子、何時まで、こんな所で寝てんの」と言って、A子を責めた。次の日から、学校へは一日も行っていない。

母は学校での出来事を「女としてだらしがない」とA子を責め、学校に行けないことを「情けない」と、定職に就こうとしない父と同じだとなじった。夫婦喧嘩はA子の生まれる前から絶えることがなかった。喧嘩といっても、母親が一方的に父を責め、父親は絶えられなくなると、何日か家にはもどらなかった。父には定職はなかったが、多才な人で、何処から稼いでくるのか、毎月の生活費は家庭に入れていた。他人と何の垣根がなく交わり合いたいと心から切望しているのに、くだらないプライドによって、それが出来ない父親に自分は何処か、似ていると思っていた。

ある日、A子は高名な児童精神科の医師の所に母親に連れて行かれた。医師は精神科の領域だけでなく、全ての検査を行い。母親に丁寧に質問した後、A子にも質問した。検査では何も問題は見つからず、医師はA子の前で投薬の必要は今のところありません。「しばらく、様子をみましましょう」と母に言った。A子は“しばらく様子をみましましょう”と言う言葉に大変なショックを覚えた。早く学校に行きたいのに行けない。行こうとすると、心臓がバクバクして、息苦しくなり、お腹も痛くなる。何度もトイレに行くが何も出ない。学校に行かなくて良いと思えば、少しは楽になるけれども、このままどうなっていくのか心配で、不安な気持ちで一杯になる。早く、こんな苦しい状態から抜け出したい、と思って、専門の医師の所に来たのに、自分の前で“しばらく様子をみましましょう”と言う。せめて、私のいない時に、母に言えば良いのに、“こんな苦しいことがわからない”精神科の医師の所には、信用出来ないから、二度と行かないと思った。

母親はしばらくの間、その医師の所に相談に行った。A子のころには何の変化も起きなかったが、母親と父親は別居した。母親はA子が自分についてくるだろうと思ったが、A子は父親と同居することを望み、A子の面倒を見られないと、判断した父親は実家に返った。母は一人暮らしを始めた。A子にとっては、祖父は優しかったが、本

当の祖母でない人は、父や祖父の見ていない所で、A子に辛くあたった。

どう云うわけかA子にはわからないが、あれだけ喧嘩していた父と母は、四年後に、また、同居を始めた。しかし、家族間の会話は全く無い。同じ屋根の下だが、別々の部屋に住み、バラバラに暮らしている。

大人の愛を知らない、大人になれない父。

自分だけしか愛せない母。

人を信じられないで苦しむA子。

こんな家族が、この国には 100 万家族もあるといわれている。「子どもの世話をするために自分の人生の時間を無駄にしたくない」「子どもは自分がさびしい時は可愛いと思うが、子どもに纏わりつかれたり、ベタベタされると煩わしい」と言う若い親が増えている。この気持ちが少子化・虐待・不登校を生み出す土壌になっていないだろうか、これらは、正に“大人に成れない、おとなの問題”なのかもしれない。

無力なカウンセラーの私に何が出来るのだろうか。

二週間おきに訪ねる私が暑がりであることを知って、冷房を強くして部屋で私を待つA子は長い間の運動不足のため、冷え性になり厚い靴下を履いて待っている。

PHSの呼び出し音、何も言わずに泣いているA子。どうしたの?・・・しばらくの無言の後、涙声で、居間に居たら、母親が仕事から帰って来て、「今日はすごく暑い。あなたは家に居て良いわね・・・」と言う言葉に傷つく、母親は何時までもA子の苦しみを共有できない。A子は一人でいる時は家の経済を考え、冷房も暖房もつけない。両親はそのことは知らない。 牟田

第11回 教師&専門家のための不登校問題研修会

決算報告書

収入の部

①受講料(有料432名)	6,412,000円
②預金利息	130円
④平成12年度決算終了後活動費	100,000円
合計	6,512,130円

支出の部

①ホール借料(機材借料、技術者料含む)	929,235円
②講師お礼(100,000×5、50,000×1、20,000×1、10,000×4)	610,000円
③講師交通費(35,000×2、7,000×1、5,000円×1、3,000×5、2,000×5)	98,000円
④スタッフ用役費及び交通費	

(時給800円×900時間h/人)	720,000円
⑤ボランティア交通費	94,847円
⑥食事代(講師・ボランティア昼食打ち合せ費用含む)	165,493円
⑦郵送費	1,605,308円
⑧印刷費	
内訳	
パンフレット	572,500円
封筒	207,000円
講義ノート	480,000円
他印刷物(受講証他)	182,500円
ラベル出力・名簿管理	205,000円
消費税	82,350円
⑨雑費(源泉預かり、事務用品費を含む)	98,398円
⑩事務諸経費(電話代等)	150,000円
⑪支払い手数料	24,410円
⑫第11回研修会参加者への報告及び研究会通信発送費	200,000円
⑬決算終了後の活動費(交通費・電話代等)	100,000円
⑭平成12年度不足分返済	790,841円
合計	7,315,882円

以上の通り相違ありません。

収入-支出=△803,752円は主催団体の立て替え分とする。

全参加者数	435名
内訳	
一般参加者	431名
招待者	4名

参加者内訳

小学校教諭	134名
中学校教諭	115名
高校教諭	84名
(中高併設学校については中学で登録)	
養護学校教諭	22名
教育委員会(適応指導教室含む)	19名
児童相談所	1名
その他(他の教育機関・施設などを含む)	54名
学生	6名

第12回 教師&専門家のための不登校問題研修会

データあれこれ(7月31日現在)

1. 都道府県別参加者数(申し込み数595名)

秋田	3	岐阜	6	愛媛	6
青森	6	三重	2	福岡	8
岩手	1	滋賀	7	佐賀	5

北海道	3	大阪	17	長崎	4
東京	97	京都	1	熊本	8
神奈川	62	奈良	4	大分	2
千葉	42	和歌山	4	宮崎	3
茨城	35	兵庫	8	鹿児島	2
栃木	15	鳥取	7	沖縄	2
埼玉	62	岡山	15	福井	5
群馬	15	広島	9	石川	8
長野	5	山口	1	富山	4
山梨	4	香川	4	新潟	13
静岡	20	徳島	1	福島	20
愛知	36	高知	1	宮城	6
山形	6				

※ここでは参加される先生方のご自宅の所在地を元にデータを出しています。

2. 学校種別参加状況

	第10回	第11回	第12回
参加総数	453名	439名	595名
小学校	99名	135名	217名
中学校	117名	149名	149名
高等学校	102名	96名	117名

(第12回の参加者数は7月31日現在)

この他にも、養護学校の先生、スクールカウンセラー、各施設相談員の先生方など多くの方が参加されています。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

新刊のご紹介

「社会的引きこもりへの援助—概念・実態・対応についての実証的研究—」

倉本 英彦

本の森出版 定価 1800円+税

倉本先生の最新刊です。入荷が8月23日の予定です。書籍コーナーでは最終日1日だけの販売になります。(予定)

「すぐに解決! 子ども緊急事態 Q&A」

様々な教育問題「虐待」、「いじめ」、「学力低下」、「不登校」、「ひきこもり」などに親や教師がどのように立ち向かい、子どもたちをどのように理解したらよいかについて、ユーモアを交えながらまとめたQ&A集。

牟田 武生

木の書店 定価: 本体 1600円+税

編集後記☆☆☆☆☆

◆毎年、残暑厳しい時期に、全国から大変多くの

先生方が研究会に参加され、本当に、熱意を感じ取れます。「明日の生徒指導のために・・・」「児童・生徒のこころを掴み取るために・・・」「より良い生徒指導のために・・・」目的はそれぞれ違うかも知れませんが、ここは毎年一つではないかと思えます。それは、我々、民間団体も、ボランティアも同じではないかと思えます。切磋琢磨の研修会は運営面でも同じです。どうか、時には厳しく、時には温かくご指導ください。(ム)

◇研修会の準備は毎年その年の3月ごろからはじまります。講師の先生のアポ取りからはじまり、後援名義使用申請、広告郵便の申請、パンフレットの作成と進みます。後援名義の申請が通るのが例年5月の中旬、パンフレットの完成が5月下旬、それと同時に全国の小中高校他へダイレクトメールを発送します。今年は6月5日でした。総数は2万5千通。教育研究所に通う不登校の子どもたちも一緒になって、印刷から封筒詰め、宛名ラベル貼りを手伝ってくれます。広告郵便のため、封書はさらに郵便番号ごとにまとめられ、箱詰めされていきます。手馴れてきたとはいえ、この作業には印刷に1週間、封入その他の作業に丸二日かかります。準備に汗を流してくれた子ども達、毎年彼らの熱い思いが込められているのです。また、保護者の方々も本当に早く準備を手伝ってくれました。当日会場で書籍の販売などの手伝いをしてくれているのも保護者の方々です。

この研修会は、少しでも多くの不登校にかかわる方々に不登校への理解を深めていただくことを目的にスタートしました。今年も実りのある研修会になるべく、事務局一同がんばる所存です。(西村)

◆研修会を手伝わせていただくようになってから、早5年。やっと慣れてきたような気がしたところで、今年は、国立オリンピック記念青少年総合センターに会場を移して行う研修会の第一回、過去最大の参加人数と、初めてのことが多い研修となりました。

様々な方が、ボランティアとして支えてくださって、行っている研修会。当日初めて会場に来て手伝ってくれる方がほとんどというのが現実です。

もちろん、研修内容が素晴らしいものになり、参加された方が、実りの多い研修を終えられることが、一番の願いです。でも、(万全を期すつもりではありませんが…)会場の勝手もわからない中で、多くの参加者の皆さんが右往左往するようなことがないように、心から願っています。田村(田村)